博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	成瀬　隆順
論　文　題　目	禅那院珍海已講の浄土教思想

審査要旨

日本仏教では、三論宗は奈良時代から重要な学派としての役割を果たして来た。その思想の特色は空思想の強調に求められる。本論文で扱われる珍海（1091-1152）もその流れにある。東大寺で三論を修学し、また画僧としても知られる学僧であるが、密教や浄土教も学んでいた。本論文が注目するのは、それらの中、浄土教思想である。珍海は日本浄土教史上、鎌倉時代の法然や親鸞と比べると必ずしも目立つ存在ではない。しかしながら、法然への影響等が指摘されているように、従来の研究でも、その思想の重要性が指摘されている。本論文はそれらを基にしながらも、珍海の思想そのものを解明すべく、法然から遡って見るのではなく、珍海に影響を与えた中国の浄影寺慧遠や三論宗の大成者である吉蔵の思想解明が企図されている。従来とは異なった視点からの解明を行ったと言える。

内容は、序章と五章から成り、それらは以下の目次の通りである。（各節の中の、諸項については省略する。）

序章

第一章　『決定往生集』成立の背景

　第一節　珍海の伝歴と著作、第二節『決定往生集』の構成

第二章　機根・行位論

　第一節　珍海の凡夫観、第二節　珍海の逆謗除取釈

第三章　信の問題

　第一節　信心と決定の関係性、第二節　暫信暫不信の解釈

第四章　菩提心正因説

第五章　念仏観

　第一節　決定業としての念仏、第二節　意業を導く口業の称名念仏、第三節　第二十願の位置づけ

総説

参考文献一覧

附録　珍海撰『決定往生集』「第五修因決定」訳注研究

第一章では珍海の生涯についての解説をし、諸著作も併せて紹介した上で、本論文での中心的検討書となる『決定往生集』について、引用文献を含め書誌的考察を行っている。これまでより広い視野から珍海の人物像を探り、第二章以降に繋げる基礎を論じたと言える。

第二章は機根と行位論を扱う章であり、往生人の機類に関する珍海の見解が検討されている。その中、珍海の凡夫観を解明するに当たり、筆者は、珍海が機の深信を論ずる際、善導の主著『観経疏』「散善義」の深心釈ではなく、『往生礼讃』の深心釈を用いたことに注目する。その理由として、珍海が「散善義」の「無有出離之縁」という表現を嫌い、『往生礼讃』の「善根薄少」という文言に依拠して、劣ながら自力を認める立場を主張しようとしたからであることを挙げる。その着眼点は興味深い。但し、「劣ながら自力を認める立場」については、法然以前の全ての諸家に共通するものと考えられ、それは「散善義」でも『往生礼讃』でも同様である。珍海が機の深信を論ずる際に「散善義」ではなく『往生礼讃』を用いた理由は、別の観点からの考察も必要なように思われる。

第三章では信について論じ、珍海の言う「信心決定」の意味を解明し、更に専修と雑修の関係性について検討している。そこに示された、筆者の「珍海は、凡夫には専修は困難であるとし、雑修による化土往生を積極的に認めていた」という指摘は評価できる。同様の見解が、第五章の「念仏観」第

氏名　成瀬 隆順

三節「第二十願の位置づけ」をはじめ随所に見え、本論文の全体を貫くものと思われる。その見地に立つならば、辺地や懈慢界は、信心を得られず、また専心に堪えられないような凡夫を救うために、仏が慈悲心によって設けた世界であるということになろう。この論考によって、珍海の組織した浄土教教理が、信以前の常没の凡夫を救済することに主眼を置くものであることが明らかにされたと言える。

第四章・第五章では、修因論が検討されている。珍海は、中国・朝鮮浄土教の伝統をふまえ、発菩提心を往生の正因、念仏を正業とする。この論考もその二点を中心とする。

第四章では菩提心正因説を論じ、「珍海は、常没の凡夫に適した実践として、発菩提心に代わって、自利のみの願生心を提示した」と述べている。その論証の過程は妥当であり、評価できる。但し、結論としての表記は、「自利のみの願生心を菩提心の範疇に含めることを認めた」と換言する方が好ましいように思われる。

第五章では、珍海の称名念仏観を取り扱っている。その中で筆者は、「珍海は、就行立信釈に説かれる称名正定業を、『無量寿経』第二十願において要求された修行と見ている」という見解を示している。そして、その論拠を新羅の浄土教典籍に求め、法位・玄一・憬興が提唱した、第十八願を上品往生の機、第十九願を中品往生の機、第二十願を下品往生の機のために起こされたものと見る説を紹介する。その検証は首肯されるものである。一言加えるならば、隋・唐・新羅における九品行位論に言及すればよかったと思う。新羅では隋唐諸家の見解を修正して、九品の行位を低く判ずる傾向にある。特に憬興は、第十八願の機である上品人の行位を十信位と見ていて、他師に比べて格段に低い評価をしている。そういった点に注目すれば、第二十願の機である下品人を、信以前の常没の凡夫であると見る珍海の立場との一致点が、より明確になったと思う。

また、三論宗の学匠であった珍海が浄土教を研鑽した意義についての研究を深めると、視野の広い大きな論文になる。今後の課題として、検討を期待したい。

全体として本論文は、珍海が、浄土教を信以前の常没の凡夫を救済するための宗教と捉えていることを、機根論・修因論を中心とする教理研究によって解明したものと評価できる。新たな知見を提示して、従来の研究を進展させた業績であり、博士(文学)の学位を授与するのにふさわしい論文である。

公開審査会開催日	2020 年　1 月　21 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	大久保　良峻	仏教学(日本・中国)	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	山部　能宜	インド哲学・仏教学	博士(イェール大学)
審査委員	大阪大谷大学文学部・教授	梯　信暁	中国・日本浄土教思想史	博士(早稲田大学)
審査委員				
審査委員				